

野田秀樹

僕が20世紀と
暮していた頃



中公文庫



中公文庫

ぼく^{せい き}が20世紀と暮^{くら}していた頃^{ころ}

定価はカバーに表示してあります。

1997年8月3日印刷

1997年8月18日発行

著者 ^{の だ ひ で き}
野田秀樹

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋2-8-7 振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA, INC. / Hideki Noda

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-202914-7 C1195

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

僕が20世紀と暮していた頃

野田 秀 樹



中央公論社

目次

牛乳瓶の章	9
ガリバンの章	21
カエルの解剖の章	33
道バタの章	45
クジラの章	55
おさがりの章	65
そろばんの章	77

ダイヤルの章

87

たらいの章

99

ちりがみの章

111

柱時計の章

123

文房具の章

133

駄菓子子の章

143

ドッジボールの章

153

運動会の白足袋の章

165

縁台の章

175

ピンク色の冷しそうめんの章

185

蚊帳の章

195

銭湯の章

205

押入れと終末観の章

215

解説

俵 万 智

227

イラスト 鈴木和道

僕が20世紀と暮していた頃



牛乳瓶の章



2035年の年の瀬もおしつまっていた。

その老人が、20世紀のことを語りはじめた、その最初のコトバはこうであった。

「20世紀には、牛乳配達という人間がいたんだな」

「なにをする人なの？」

「牛乳を、朝、家まで配達してきたんだよ。自転車の荷台に牛乳をのせて、ガラガラ、ガラガラ音をたてながらね。その音を聞いては、おー、まだ牛乳の時刻か、新聞の時刻まで眠っていろいろって、目ざまし代りに、人々は、使っていたんだ」

この12月20日で80歳になる野田秀樹は、二人の孫にむかって、こうして『僕が20世紀と暮っていた頃』を語りはじめたのである。

孫は、12歳の男の子と10歳になったばかりの女の子であった。

「二人とも、21世紀に生まれたので、20世紀で消えてしまったものをまるで知らない。

これでは、いかんと思った」

と後日、野田秀樹は、この『僕が20世紀と暮していた頃』を語りはじめた動機について、そう述懐している。

「なんで、牛乳が、ガラガラって音をたてるの？」

目も顔も、まんまるな、女の子がたずねると、野田秀樹は、20世紀の牛乳への熱き思いを、ほとばしらせるように語りだし、かくて牛乳瓶の章は、はじまったのである。

「牛乳はね、その頃、牛乳瓶という瓶に入れられて、毎朝、配達されていたんだ」

「その瓶、ワインの瓶のようなもの？」

「そう。ガラスでできた瓶の種類でも、ワインとか日本酒のように、20世紀を越えることができたものと、越えられなかったものがあるんだ」

「越えるか、越えられないかは、運だね」

丁度、ラグビーをはじめて、ラグビーボールに運というものを教わったばかりの12歳の男の子が、思わず使ったコトバを野田秀樹は容赦なく否定した。

「運ではないな」

「じゃあ、なに？」

「酒の瓶は、酒呑みという執念深い人間によって、その瓶という形が守られた。『なに!? 日本酒の一升瓶を、紙バックの箱で売り出すだ!? 冗談じゃねえや、プワーッ、そんな酒を、この俺様が……っち……、呑めると……ういっ、…思ってるんでござんすか、ときたもんだあっ!?』。かくて、われやすい瓶が、不便なものだとは、わかっていながら、酒を製造する会社は、酒瓶を変えることができなかった。あの不便な酒瓶は、酒呑みという人間の、執念深い愛によって、20世紀を越えたのだ。ところが牛乳には、牛乳呑みというのがない。『ほんとにねー、ふだんは大人しくて、いい人なんだけど、牛乳が度を過ぎるとねー、どうしてあの人は、牛乳をやめられないんだろうね、牛乳さえやめられれば、申しぶんのない人なんだけどねー』といった牛乳呑みがいなかったんだ。だから、牛乳瓶を牛乳のバック箱に変えるという荒業が、なんの抵抗運動をうけることなく実現してしまったんだね」

野田秀樹は、そう言って、ひと息つくくと、そばにおいてあったバックの箱の牛乳を、ストローで吸いこんだ。

「牛乳瓶がなくなっただおかげで、牛乳を呑んでいる友達に『うんこ、ぐちゃぐちゃ』

などと突然言つて笑わせ、思わず牛乳をふきだした友達の口のまわりから服までが、まっ白になるという風情も、20世紀で消えちまつたなあ。消えた風情は、そればかりじゃないな。牛乳瓶の口のまわりには、何故か、桃色のビニールがくらのげのように、はりついていて、おそらく清潔のためなんだろうなあ。綺麗好きの日本人らしい心遣いだなあ。輪ゴムで、そのビニールのカバーは、牛乳瓶の口をしめつけていた気がするな。少し時代が進むと、キャラメル同様の、細いビニールのひもで封印されて、びりびりっと、はがしていたな。本当に、それで、他人の唇から牛乳瓶の清潔さが守られたと思うかい？ そんなことはないね。当時の中学生達の冒険談が、そいつを物語ってる。朝早く、通学途中で、他人の家の牛乳受から、牛乳をすばやくとりだし、一息で吞んで、ふたたびビニールのカバーをして牛乳受に戻すという難行がおこなわれたんだ。これに成功したものは、一週間は英雄として崇められてまつられた。そういえば、牛乳瓶が消えて牛乳配達が消え、牛乳配達が消えて牛乳受も消えたわけだな。あの牛乳受というの、重宝したものだ。大人は大人で、ちょいと外出する時、家の鍵を隠し入れたりしていた。けれど、大人というのは、浅知恵だな。当時、牛乳箱を開ければ、家の鍵が入っているということを、知らない者はいないのだから、なんの秘

密にも、なっちゃいないわけだ」

「僕ならそんなもの入れないな」

今年、はじめてのえと、というものを経験した12歳の孫は、誇らしげに反論した。野田秀樹は、うなずきながら、

「そうなんだよ。大人は、秘密の隠し方というのが、上手じゃないんだな。その点、子供は、いのちがけだな。蛙とか嫌われている虫とか、家の中へもちこんではいけないものがあるだろう。もちこんだが最後、自分まで虫けらのように家人から罵声を浴びせられる。けれども、その珍しい蛙を、翌朝学校で友達にみせびらかしたい。その一心。そういう時の夕方から翌朝まで、こんな時のために牛乳受というのがあった。

牛乳受の中に、蛙や虫を別の容器に入れて隠しておくのだ。新聞受と違って、牛乳受は、夕方は誰も関心を示さない。翌朝、まっ先におきて、ふだんは言ったこともない『今日は、僕が牛乳をとってくるよ』などというセリフをはいて、まっ先に牛乳受から、虫をとりだすのだ。但し、牛乳受に直接虫を入れたりすると、逃げ出したり、牛乳瓶につぶされたりする。あくまで念入りに、別の容器に入れておくことが大切なんだ。牛乳受は、虫入れそのものではなくて、虫入れの隠し場所なのだ。これを取りち

がえてはいけない。時々見つみると、母親などというのが、『牛乳受は、虫を入れるところではありませんよ』と叱っていたけれど、そんなことは子供の常識なのだ。牛乳受は、虫入れではない。虫入れの隠し場所なのだ」

牛乳受に入れた虫のことで、叱られた話を、まるで子供の一般論のように野田秀樹は語ったけれども、

「他人事にしてはあの話、熱が入りすぎてたよね」

孫たちは、そう思った、という冷静な感想を、後で得ることができた。

「牛乳瓶、牛乳受とくれば、後は、牛乳瓶の蓋だろうな。これは、当時、切手、ワッペン、シールと並ぶ、男の子の四大コレクションのひとつだった。他の三つとくらべても、元手がかからないので、貧富の差の少ないコレクションだったな。ワッペン、シールは、お菓子についているものだから、どうしても大人の力にすぎらなくてはいけなかった。大人の力にすぎるといのは、つまり、こづかいをもらうということだな。だから、金のために媚びを売るといいうことを、おじいちゃんの頃は、ワッペンやシールではじめて、覚えたんだな。切手の場合は、スタンプのついたやつでよければ、うまく、水を使って手紙からはがして集めることができたが、やっぱり、ここ一番、